

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 24 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26370399

研究課題名（和文）古代ロシア文語成立時におけるブルガリア制作アブラコスのルーシへの伝播と寄与

研究課題名（英文）The spread of the Bulgarian gospel lectionaries to Kievan Rus' and their contribution to the formation of the Old Russian literary language

研究代表者

岩井 憲幸（Iwai, Noriyuki）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：60193710

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：『ヴァチカン・パリンプセスト・キリル・アブラコス』を四福音順に置き換え、『サバの本』全体に対置させてパラレル・テキストを作成した。ロシアのアブラコスとの関連性を重視しつつ研究し以下の知見を得た。すなわち、ルーシにおけるアブラコスの写本制作はブルガリアで先行あるいは併行して行われていた写本制作と密接に関係し、かつブルガリアの単数の写本に遡源するのではなく、複数の写本テキストさらに伝統的に学習されストックされていた語彙・語法群からも意図的に選択されて、ルーシの写本は制作されていた。これらルーシの初期の写本でのテキストは、古代ロシア文語成立に重要な枠組みを与え、かつ体現しつつ展開してゆく。

研究成果の概要（英文）：From 2014 through 2016 we did philological research on the contribution of the Bulgarian gospel lectionaries to Kievan Rus'. Through the research, we showed that the gospel lectionaries of the eleventh century Kievan Rus' did not go back to any single gospel lectionary but they were created based on the different Bulgarian gospel lectionaries brought about by that time.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：古代ロシア文語 古代教会スラヴ語 ブルガリア写本 スラヴ文献学

1. 研究開始当初の背景

(1) 今次研究課題の申請に際して、「古代ロシア文語 (Old Russian Literary Language) 成立時におけるブルガリア制作アブラコス (祝祭日用の福音書抜粋) のルーシへの伝播と寄与」というテーマを掲げた。これは、平成 22 年度から 25 年度にかけて行われた「古代ロシア文語成立の萌芽期におけるブルガリア写本テキストの影響について」という研究を受けると同時に、さらには、そもそも平成 7 年 (1995 年) から我々が本格的に取り組み始めた『アルハンゲリスク福音書』等の研究に対して、これまでの知見の蓄積を踏まえて、より高い視野から総括を行うという試みでもあった。

(2) この分野で 20 世紀の後半に時代を画した業績を残した

の指摘によれば、ロシアの 11 世紀のアブラコスは、様々の編集から判断して、或る一つの古代教会スラヴ語原典に遡るようなものではなく、異なるいくつかの原典を元に作成されたものとされる。すでにキエフ・ルーシにあっては、写本の作成時にブルガリア (さらにはギリシアなど) から請来された多数の原典が参照されたと考えられる。キエフ・ルーシでの写本の作成に際しては、機械的に筆写するのではなく、より洗練しよう、より分かり易くしようといった「編集」的な態度がとられた。このような創造的な洗練作業とも名づけるべきものが可能となった背景には、当時のロシアの置かれた状況がある。

(3) 11 世紀中葉にビザンツでは典礼改革と諸典礼書の根本的な拡充が進む。その影響でスラヴ語典礼の拡充も惹き起こされたのだが、ブルガリアでは 1018 年の第一次ブルガリア帝国の滅亡の時期から (実際には 10 世紀の末から) 教会がビザンツ支配下に置かれ再びギリシア語典礼にもどっていた。ビザンツの典礼改革・拡充に促されたスラヴ語典礼の必須の拡充を担うべき中心はキエフ・ルーシに引き継がれて、やがて写本の作成や既存のテキストの改訂、さらには、新たな翻訳 (教会文献に限らず世俗の文献も) が主体的に行われてゆく。ヴラジーミル大公によるキリスト教国教化の前後、ビザンツからギリシア語の文献が相当の分量、直接に請来されたことも確かであるが、ブルガリアからスラヴ語で書き記された文献が圧倒的に数多くもたらされたことには異論が無い。写本を集めることは並大抵のことではなく、国家の威信をかけた事業であった。ヤロスラフ賢公 (在位 1019 - 1054) は、『原初年代記』の 1037 年のくだりで、「書物に心惹かれ、夜も昼もしばしば本を読んでいた。多くの写し手を集め、彼らはギリシア語からスラヴの言葉に翻訳した。多くの本を書き写して・・・」と記されている。

(4) ビザンツの典礼改革・拡充を踏まえて取り組まれたスラヴ語典礼の拡充は、まずは

1092 年成立の『アルハンゲリスク福音書』にその具体例を見ることが出来る。『サヴァの本』、『アッセマーニ写本』はもとより、『オストロミール福音書』といった従来のスラヴのアブラコスにおいては、たとえば、受難週間の聖月曜日から聖金曜日までは一日に一回の祈禱で、聖土曜日のみに早課と晩課がある (この他に「十二福音」(福音書の中のイエス・キリストの受難の箇所) が含まれる)。一方、拡充が施された『アルハンゲリスク福音書』では、聖月曜日から聖木曜日にも早課があり、一日に二回の祈禱が行われる。さらに聖金曜日には 1 時、3 時、6 時、9 時が設けられ、合計 5 回の祈禱が行われる。

(5) かくして、古代ロシア文語成立時において、ブルガリアで制作されたアブラコスがいかにルーシへと伝播され、ルーシがいかに選択的に受容し、同時にいかに古代ロシア文語成立に寄与したかを探求することに取り組んだ。

2. 研究の目的

今次研究課題の申請に際して、「Old Russian Literary Language (古代ロシア文語と通称される) の成立時において、ブルガリアで制作されたアブラコス (祝祭日用の福音書抜粋) がいかにルーシ (中世ロシアの地) へと伝播され、ルーシがいかに選択的に受容し、同時にいかに古代ロシア文語成立に寄与したかを探求する」ことを研究の目的に掲げた。このことは、ロシア語史のみならず、ロシア語研究のそもそもの根本問題に関わる重要な課題である。

3. 研究の方法

(1) ブルガリアのアブラコスとしては、古代教会スラヴ語のカノン・テキストである『サバの本』(Sav) と 1982 年の発見になる『ヴァチカン・パリンプセスト・キリル・アブラコス』(VP) を主な材料とする。ロシアの 3 アブラコス『オストロミール福音書』『アルハンゲリスク福音書』『ムスチスラフ福音書』に加えて、『サバの本』カノン部分の前後に付された中世ロシア制作のテキスト (Sav1 と Sav3 と呼ぶ。なお、カノンの本体部分は Sav2) も考察に加える。

(2) 当初、前次研究までに作成を終えた『アルハンゲリスク福音書』『オストロミール福音書』『ムスチスラフ福音書』『サバの本』カノン部分 (Sav2) のパラレル・テキストに、今次作成の VP および Sav 全体 (Sav1、Sav2、Sav3) のパラレル・テキストを加えて 5 写本のパラレル・テキスト作成を企図したが、これをとりやめ、今次は VP と Sav1、Sav2、Sav3 のパラレル・テキスト作成に留める。その理由として、1) VP テキスト刊本の難読部分に多くの疑問点がある、2) これを確認する術がない(

2502, 2002, にはファクシミリを載せるが、パリンプセスト故、ほとんど読めず) よって結局ブルガリア刊本に依拠するほかはない。3) 文献学的正確さを期する立場から、VP 刊本を暫定的テキストと認めて、これを Sav 全体とのパラレル・テキスト作成に留めるのが妥当と考える。

(3) テキスト電子化作業の内『サバの本』(Sav)については、カノン部分(Sav2)と非カノン部分(Sav1, Sav3)は共に電子化・校正・福音書番号順の並べ換えを済ませ、『ヴァチカン・パリンプセスト』(VP)については電子化の後、校訂本中小文字で表示されている箇所(原本がパリンプセスト故、判読がやや困難な部分をこのように活字化)を校正において色分けする作業を行なう。今次作成するパラレル・テキストにおいては、文字の大小を技術的に区別することが困難なため、色分けにより表示する方式に改める下準備である。最終年度で上記色分けを施した上で四福音順に置き換え、これを処理を終了した Sav 全体に対置させてパラレル・テキストを作成する。

(4) 一方、非カノン部分の Sav3(11c 末 12c 初、ロシアで成立)を、VP と対置させることの妥当性を再吟味すべく、その言語的特性を検討する。Menologion 中の聖土曜日に誦する早課 11 の福音の内、第 10 の福音が Sav2 と Sav3 で重複して存在する故、ここでの差異を手掛りとして、文字・記号・音韻・形態・語彙の諸側面に亘り Sav3 を詳細に調査する。

4. 研究成果

(1) 『サバの本』(Sav)については、カノン部分(Sav2)と非カノン部分(Sav1, Sav3)は共に電子化・校正・福音書番号順の並べ換えを済ませた。『ヴァチカン・パリンプセスト』(VP)については電子化の後、校訂本中小文字で表示されている箇所(原本がパリンプセスト故、判読がやや困難な部分をこのように活字化)を校正において色分けする作業を行なった。今次作成するパラレル・テキストにおいては、文字の大小を技術的に区別することが困難なため、色分けにより表示する方式に改める下準備である。最終年度に VP を四福音順に置き換え、Sav 全体に対置させてパラレル・テキストを作成した。

(2) 本研究では Sav1, 2, 3 を 1 冊のアブラコスとして扱う前提に立つが、岩井は Sav3 がカノンの Sav2 と同等に扱いかどうかを検討した。結論は Sav3 が早期のロシア教会スラヴ語であることを認識した上であれば、充分扱いかう。検証は Sav2 と Sav3 の重複部分(メノロギオン中の聖土曜日に誦する早課 11 の福音中第 10)をカノンの「マリア写本」も添えて比較検討し、Sav3 の特徴点を探り、これを基に Sav3 の他部分を検討。j u s y の混乱、j e r s の比較的正しい使用、動詞 3 人称語尾 - t 、アオリスト 3 人称複数語尾 - sha 等々重複部分と同じだが、スラヴ祖語

の *tj, *dj に対する東スラヴ語の対応形 ch, zh の内、zh の例を 4 箇所で見出した。

(3) 同時に、岩井は非カノン部分の Sav3(11c 末 12c 初、ロシアで成立)を、VP と対置させることの妥当性を再吟味すべく、その言語的特性を検討した。Menologion 中の聖土曜日に誦する早課 11 の福音の内、第 10 の福音が Sav2 と Sav3 で重複して存在する故、ここでの差異を手掛りとして、文字・記号・音韻・形態・語彙の諸側面に亘り Sav3 を詳細に調査した。結論として、Sav3 は全体からみればカノンの Sav2 から大幅に逸脱するテキストを有するわけではなく、Sav3 が依拠したと推定される東ブルガリアで既に改修を加えられたテキストの影響下で、一部ロシア化した現象が認められるテキストである、よって Sav3 はこの点を認識した上であれば、Sav2 と同等に扱ってよい、と考える。

(4) 以上から、前次研究までに作成を終えた『アルハンゲリクス福音書』『オストロミール福音書』『ムスチスラフ福音書』『サバの本』カノン部分(Sav2)のパラレル・テキストとも比較検討を行ない、とりわけロシアのアブラコスとの関連性を重視しつつ課題究明に取り組んだ。服部はロシアの 3 アブラコス『オストロミール福音書』『アルハンゲリクス福音書』『ムスチスラフ福音書』と古代教会スラヴ語カノンの諸アブラコスとの間で、シュナクサリオンに焦点を当てて再度比較検討の上、ロシアの 3 アブラコスの共通特徴・个性的特徴の明確化も試みた(成果は ICCEES 中欧・東欧研究国際協議会世界大会、2015 年於幕張で発表された)。

(5) さらにまた、キエフ・ルーシとブルガリア間の影響関係をより大きな枠組で考察すべく、『スヴァトスラフの文集』や旧約聖書続編などのようなキリスト教文化全般に関わる諸テキストの中世ロシアへの伝播におけるブルガリア写本の影響についても考察を広げた。ロシアで周知の『賢者アキールの物語』に注目し、その祖型と伝播の問題にも取り組んだ。『賢者アキールの物語』を収めるロシア最古の写本はプスコフとの関係を指摘されているが、我々の研究対象 Sav2 もプスコフとの関連が言及されていることから、両者の接点についてはいっそうの研究が要求されると考える。

(6) このようにして、最終年度では VP を四福音順に置き換え、Sav 全体に対置させてパラレル・テキストを作成した。併せて、既存の上記 4 本対比テキストとも比較検討を行ない、とりわけロシアのアブラコスとの関連性を重視しつつ課題究明にあたり、報告書を作成して関係する研究者や研究機関に配布し、得られた知見を共有した。すなわち、ルーシにおけるアブラコスの写本制作はブルガリアで先行あるいは併行して行われていた写本制作と密接に関係し、かつブルガリアの単数の写本に遡源するのではなく、複数の写本テキストさらに伝統的に学習され

ックされていた語彙・語法群からも意図的に選択されて、ルーシの写本は制作されていた。これらルーシの初期の写本でのテキストは、古代ロシア文語成立に重要な枠組みを与え、かつ体現しつつ展開してゆくこととなったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

岩井憲幸、『サバの本』第 3 部分における言語的特性についての覚書、明治大学教養論集、査読無、508 号、2015 年、1-32、<http://hdl.handle.net/10291/18020>
服部文昭、

1092

、査読あり、Die Welt der Slaven、Bd. 55.、2014 年、63-72

[学会発表](計 6 件)

服部文昭、『賢者アキールの物語』をめぐって ロシア文章語史の視点から、特別セミナー スラヴ文献言語学の課題と新たなアプローチ 『賢者アキールの物語』の分析を例に、2014 年 10 月 11 日、「東京大学文学部 (東京都・文京区)」

服部文昭、The Russian Recension of the Story of the Wise Akyrios, Reconsidered、スラヴ文献学国際シンポジウム：The Story of Akir the Wise: A New Approach to the Medieval Slavic Literature、2015 年 3 月 16 日、「北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター (北海道・札幌市)」

服部文昭、The Mstislav Gospel, Reconsidered、ICCEES, IX World Congress 2015 (第 9 回中欧・東欧研究国際協議会世界大会)、2015 年 8 月 8 日、「神田外国語大学 (千葉県・千葉市)」

服部文昭、『賢者アキールの物語』の最古のロシア版、日本ロシア文学会 65 回 (2015 年度) 定例総会・研究発表会パネル：中世スラヴテキスト研究の新たなアプローチ、2015 年 11 月 8 日、「埼玉大学人文社会科学部研究科 (埼玉県・さいたま市)」

服部文昭、Tale of the Twelve Dreams of King Shahinshahi、スラヴ文献学国際シンポジウム：中世スラヴ語テキストの多元的研究 - スラヴ文献言語学の新たなアプローチをめざして -、2016 年 3 月 15 日、「北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター (北海道・札幌市)」

服部文昭、《 》

12

XIII - XIV .?、日本

ロシア文学会 66 回 (2016 年度) 定例総会・研究発表会パネル：

2016 年 10 月 22 日、「北海道大学文学部 (北海道・札幌市)」

[図書](計 1 件)

岩井憲幸、私家版、『古代ロシア文語成立時におけるブルガリア制作アプラコスのルーシへの伝播と寄与』、2017、iii + 179 ページ
[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩井 憲幸 (Iwai Noriyuki)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：60193710

(2) 研究分担者

服部 文昭 (Hattori Fumiaki)

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：80228494

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()